

【静軒先生之碑 表面翻刻】

※□は異字体

題字

静軒先生之碑

泰宮御用掛御歌所寄人從五位勲五等阪正臣篆額

先生族久野名保心字存夫静軒其號世住知多之加木屋
今之横須賀也以安政六年六月十八日生幼志乎學從中
山樸軒弘齋兩夫子受洛閩之學後受皇典於御巫棒園翁
爲人謙恭和易而刻苦力學以斯文自任誘掖後進諄諄不
倦三十餘年如一日執贄及門者其衆鄉俗翕然嚮化旁善
韻語及国風又嗜繪事講授之暇優悠自適於榮華聲利泊
如也頃者門人相謀欲碑以章其德屬銘于余余與先生同
鄉而同學相知之深莫如余者義不可辭銘曰

山蒼水清 地靈人瑞

勤名貞珉 師道不墜

大正三年甲寅秋九月

早川由馨 撰

中川衡憲 書

【静軒先生之碑 表面 現代語訳】

静軒先生の碑

やすのみや
やすのみや
泰宮（明治天皇第九皇女泰宮聡子女王・後の東久邇宮聡子）御用掛御歌所寄人従五位勲五等
ばんまさおみでんがく
阪正臣篆額（石碑上部の題字のこと）

せんせい せんせい くの な ほうしん あざ そんぶ
先生は姓を久野、名を保心、字を存夫、その号は静軒と称し、知多の加木屋村に住む。今の横須賀町である。

あんせい ねん がつ にち う ようしょう がくもん せいけん
安政六年（一八五九年）六月十八日に生まれ、幼少より学問を志し、中山棟軒、弘齋両親子に従い朱子学を学び、後には古典・国学を女性の神職から学んだ。

おきな れいぎただ おだ やさ せいかく けんめい がくもん
翁は礼儀正しく、穏やかで優しい性格で、懸命に学問につとめた。このことから漢文を後進の者に分かりやすく説き、導くことを自ら行い、三十年余りつとめたが、一日として飽きるようなことはなかった。弟子には、多くの者が集まり、それぞれの地元をより良くした。静軒先生は和歌ではなく漢詩が得意であった。

かいが こうぎ あいま おし ゆうゆうじてき ようす
また、絵画をたしなみ、講義の合間などに教えていた。悠々自適な様子はまるで李白のようであった。

この頃、門人たちは互いに話し合い、静軒先生を記念する石碑を立てることで先生の功績を記して残そうと考えた。

わたし せいけんせんせい どうきょう
私は静軒先生と同郷であり、同じ学び舎で学んだといっても、先生を良く知るほどの者ではなかったのであるが、文章を頼まれたのでここに記すものである。

やま あお みず すがすが ちれい ひと わかわか
山は蒼く、水は清々しく 地霊は人を若々しくうるわしくさせる。

せんせい な せきひ しる ひと し まも みち お
先生の名を石碑に記せば 人の師として守るべき道が堕ちることはない。

たいしょう ねん きん
大正三年（一九一四年）甲寅年の秋九月 早川由馨 撰文 中川衡憲 清書

【静軒先生之碑 裏面 翻刻】

門下生有志

曾根賢宗
立松眠静
森岡藤吉郎
久野久次郎
久野武三郎
阿知和安彦
久野茂三郎
塚本活龍
伊藤旭道
鬼頭圓定
坂野貞三
阿知和誠造
坂野廣七
淺田 茂
近藤喜一
板倉惠山
坂野泰中

中島政藏
水野平治
佐治亮佑
淺田富太郎
神野銀三郎
黒崎 新
加藤金兵衛
伴野博暉
村瀬定治郎
久野重吉
早川新吉
竹内直吉
早川正一
荒川圓教
橋本為次
久野義雄
伊藤萬宗
山田鉞太郎
佐藤全峰

發起者

安島俊三
久野重之助
久野保一
坂野好文
淺田 晴
井上彦治
坂野修一
森岡幸一
中村重孝
久野喜一郎
北川隆俊
佐野正臣
淺見安治
久野玉治
柚原見光
久野乙藏
高津正之
石濱鑛之助
高津洋平

高津金之助
久野尊資
早川正輔